

2025 年ブラジル研修旅行の報告

はじめに

小井沼眞樹子（日本基督教団隠退牧師）

2025 年 9 月 4 日～27 日、ラキネット主催によるブラジル研修旅行を実施しました。2015 年に実施して以来、9 年間のブランクを経て昨年再開され、引き続き今回第 2 回目の研修旅行でした。

参加者は比企敦子さん（日本基督教団紅葉坂教会信徒、NCC 教育部理事、農村伝道神学校講師）と他谷尚さん（同教団扇町教会信徒・会社員）のお二人です。

今回研修された比企さんは、数年前からブラジル研修をしたいと申し出ておられましたが、NCC 教育部総主事を務めておられる間は休暇を取るのが困難で先延ばしになっていました。昨年 3 月に教育部総主事を退任されて、今年、念願がかなって参加していただけたことは大変幸いでした。比企さんの長年関わって来られた諸課題や問題意識をベースにしなが、ブラジルと出会い、人々と交わり、新たな発見が与えられたことなどをその報告記を通していきいきと詳細に伝えてくださいました。ぜひお読みくだされ、その体験を分かち合っていたきたいと願っています。

他谷尚さんの報告記はまだ届きませんが、彼は昨年同志社大学神学部を卒業され、その関心は主にキリスト教と農業教育との関係ということで、大学ではブラジルの MST（土地なき農業労働者運動）についても学んだそうです。そのような視点をもってブラジル研修された他谷さんの報告記は、またとても意義深い内容ではないかと期待しています。届き次第、ホームページに追加いたします。

旅路の詳細は以下の通りです。

① サンパウロ：9 月 5-6 日

リベルダーヂ日本人街、サンパウロ大聖堂、セー広場、ファベラ・ミュージアム

② ブラジリア：7-11 日

「GRITO」に参加、性的少数者の方との面談、神学対話、日系教会との交流、農業移民を訪問

③ ジョアン・ペソア：12-14 日

南米の最東岬、マリア・ガレーガさんの共同体の朝食会とミサ、マンダカルー教会のミサ

④ オリンダ：15-17 日

オリンダ歴史街、アルト・ダ・ボンダーヂ・メソジスト教会の祈祷会と教育活動、家庭訪問

⑤ サルバドール：18-21 日

CESE、トリンダーヂ共同体、奴隷広場、シゲ神父の講座、ヴァレリオ・シルヴァ合同長老教会

⑥ イグアスの滝観光：22-23 日

⑦ サンパウロ：24-25 日

MST 本部訪問、移民資料館、デイサービス、シャローム参加

比企敦子(日本基督教団紅葉坂教会・NCC 教育部・農村伝道神学校講師)

あなたはわたしの嘆きを数えられたはずです。
あなたの記録に／それが載っているではありませんか。
あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください。(詩編 56・9)

はじめに

昨夏、ブラジルでの「ラキネット研修」にお誘いいただきましたが、日程調整が難しかったため断念しました。今回研修に参加できたこと、また長年の願いであったアルト・ダ・ボンダージ・メソジスト教会(オリンダ市)訪問を実現できたことに深く感謝しています。

2018年度日本キリスト教協議会(NCC)教育部「平和のきずな献金」海外献金先のひとつが上記教会の教育プログラムでした。当時、日本基督教団派遣宣教師であった小井沼眞樹子さんを窓口として支援させていただきました。

同教会の教育プログラムは、空手教室や音楽プログラムを通して、貧困地域の子どもたちが前向きに生きていく活動への支援を、全国の教会やキリスト教学校に紹介して献金を募りました。支援献金は2019年にお届けできましたが、いつか現地を訪問してプログラムに参加している子どもたちや担当者にお会いしたいと願いました。この度、訪問が実現できた事は大きな喜びでした。

「ラキネット」ホームページには、これまでの研修参加者の方々の詳細な報告が紹介されています。その年によってテーマは多少異なると思いますが、フィールドワークの内容は、ほぼ同様かと思います。本稿では、これまでの内容と重複しないよう配慮しつつ、今回の研修で新たに気づかされた点や思いを報告した後、日本のキリスト者に問われている事柄について少し述べさせていたきたいと思います。

小井沼さんから事前に提示された『被抑圧者の教育学』パウロ・フレイレ著(亜紀書房)、『ポーボの風を受けてー「ラテンアメリカ・キリスト教」ネット運動10年史・エッセイ・史料集ー』(ラキネット出版)、『ただそこに居なさい! 小さな宣教師のブラジル通信』(キリスト新聞社)などを読み、現地の教会や集会で紹介するパワーポイント等を準備して臨みました。海外宣教師として約30年ブラジルで働かれた小井沼さんと、現地の方々との長年にわたる交流に支えられた豊かな研修旅行でした。

冒頭に掲げた詩編の一節は、ブラジル滞在中だけでなく帰国後も頭から離れない言葉です。限られた地域から一步も出ずに暮らしている人々、困窮の中にある人々、各地で出会った人々の嘆きと祈りの言葉です。けれども嘆きや祈りに留まらず、与えられた場で生き生きと活動している信仰に接することができました。嘆きの言葉と涙は、神の革袋にしっかり蓄えられていると信じることができました。

なお、日本バプテスト連盟「女性連合」からの依頼を受け、ブラジル訪問について発行誌『世の光』『聖書研究』12月号・1月号に連載しました。NCC 教育部発行ネットワークニュース No.74(11月発行)にもインタビュー記事が掲載されました。本稿は、両誌と重なる記述があ

ることを予めご承知おきください。

I ラテンアメリカ・ブラジル連邦共和国

1960年代に第2バチカン公会議のもとでカトリック教会がエキュメニズムに扉を開いた時、それと連動するように南米に解放の神学が生まれたと聞いています。ポルトガルの植民地として、約300年間に連れて来られた600~1200万人とも言われるアフリカ人「奴隷」と先住民族。特に、それらの女性たちへの植民地支配者による性暴力の結果生まれた「混血」が人口の基層を成し、その後、世界各国から移民してきた人種と複雑に混血しました。ブラジル社会では、これらの子孫が多様に交じり合っていますが、アジア系とは異なり、皮膚の色、骨格、顔立ちなどによりルーツも分かりやすいです。十代での妊娠も決して珍しいことではなく、滞在中にお会いした方々の中にもシングルマザーが多くおられました。若くてもしっかり子育てをされていました。家庭を捨てて蒸発してしまう父親(男)たちは、必ずしも仕事を得られないためだけではないでしょうから、十分な教育を受けられなかった世代か、あるいは奴隷制の負の遺産で、そもそも家庭を形成するという意識や責任感が希薄なのかもしれません。

「Capela dos Aflitos」(苦しむ者たちのチャペル)

サンパウロ到着後市内を散策し、リベルダーヂ(自由)と呼ばれる日本人街を通り上記教会へと向いました。この教会は現在修復中ですが、工事の壁に教会の歴史を紹介する壁画が描かれていました。当時は公営墓地があった場所だそうですが、ポルトガル支配下で「黒人」の労役者が賃金未払いに対して抗議したために絞首刑にされました。しかし彼の首に巻かれた縄が3回とも切れて命が助かったことから自由という地名となったということです。けれども結局彼は撲殺されたのだそうです。聖堂の名前はそこからきています。悲惨な歴史の事実を知ると共に、この場に教会が存在することに深い意味があると実感させられました。神は、この地で苦役を担わされた奴隷の苦悩だけでなく、その末裔が今も抱える苦悩をも見ておられます。

特別展示「ファベラ・ミュージアム」

展示は、ファベラを紹介する写真と共に、スポーツだけでなく芸術文化面での活躍も多く紹介されていて、まさにいのちの躍動と燃焼の記録でした。逆境を乗り越え、世界で活躍する場が与えられた若者たちの眩しいエネルギーに圧倒されました。著名なサッカー選手の背景などは日本でもよく知られていますが、試合後、競技場にひざまづいて十字を切る姿は、ただ単に試合での勝利を感謝しているだけではなかったようです。極貧の中で育ち、努力の末に得られた活躍の場を、神にこころから感謝する姿勢の表れでもあるのだと思います。ファベラで暮らしている子どもたちにとって、大きな励みです。

第31回「GRITO」dos excluidos,excluídas e excluídes「締め出された(排除された)者たちの叫び」

9月7日は、ポルトガルからの独立記念日です。カトリック全国司教会議が1995年に開始

したそうですが、さまざまな市民活動団体による政府への抗議集会が各地で開催されます。わたしたちは、ズンビ(逃亡奴隷のリーダー)の胸像が立つブラジリアの広場での集会に参加しました。日本で 5 月 3 日に開催される「憲法集会」を小規模にしたような気軽な集会で、各団体からの連帯のメッセージと共にシュプレヒコールが続きました。

政権に対する批判や問題提起、ボルソナロ前大統領恩赦反対、抑圧されている人びとやパレスチナへの連帯も呼びかけられていました。参加した若者たちは輪になって踊っていました。その市民の抗議が反映されたかのように、9 月 11 日ブラジル最高裁判所は、大統領選挙の結果を覆そうとしてクーデターを企てた罪などに問われていた J.ボルソナロ前大統領に有罪判決を下し、禁錮 27 年 3 カ月の刑を言い渡しました。最高裁の判事5人は、有罪判決からわずか数時間後に量刑を告げたそうで、日本の最高裁とは大きな違いです。

II ブラジルのカトリック教会・信仰共同体・NGO

「種の穂を背負い、泣きながら出ていった人は
束ねた穂を背負い 喜びの歌を歌いながら帰ってくる」(詩編 126:6)

地球のほぼ反対側に暮らす日本から見たブラジルは、圧倒的な経済格差と富裕層による政治の腐敗、多民族・貧困問題、アマゾン川流域の開発とアグリビジネスなどにばかり注目が集まり、南米で生まれた解放の神学には中々焦点が当てられていないように思います。日本のキリスト教神学がドイツや欧米中心だからでしょうか、とても残念に思います。

事前に書籍により基礎的な知識は得ましたが、今回、カトリック司祭を中心に活発に活動している「信仰共同体」に連なる信徒の姿に圧倒されました。解放の神学の一端を垣間見ることができたように思います。

レシーフェ、オリンダ、サルバドールの教会の周囲は確かに貧困地域ではありましたが、わたしたちが訪問した共同体自体は正確には「キリスト教基礎共同体」ではないとのことでした。農村地域や治安の悪い地域などにもっと足を踏み入れなければ経験できないのかもしれませんが、それでも、十分に信仰共同体の「息吹」に触れることができたように思います。具体的には、マンダカルー地区での月2回の「スープ」の配給、子どもたちを対象にした日曜日の「朝食会」、サルバドールの「トリンダージ共同体」などです。マンダカルー地区では、近隣の共同体の信徒の献金によって「朝食会」が継続されていることにも驚きました。運営スタッフは主に母親達ですが、「ドラッグ」や「悪の道」に転落しないようにと、祈るように見守っているのです。まさに信仰共同体の働きだと実感しました。

滞在した各地では、イエズス会をはじめとするカトリック施設に宿泊させていただきました。朝夕の食事を共にし、翻訳アプリを駆使しながら交わした雑談が心に残っています。その司祭方が担当している地域の教会でミサにあずかりました。司祭・会衆・子どもたちが活発に応答しあう礼拝(セブレラソン)は、わたし自身はこれまで経験したことがない「解放された場」と感じ、大変羨ましく思いました。米国の教会で多少似たような経験をしましたが、良い意味でのラテン系のおおらかさに救われました。文化の違いが背景にあるとはいえ、日本の教会での礼拝は「厳粛さ」が求められているようです。ミサの中で、司祭と気軽にやり取りできる子ども

たちは本当に幸せだと思いました。翻って、日本の CS には、あのような解放感・喜び・楽しさがあるのかと自問させられました。

「トリンダージ共同体」(サルバドール市)

使われなくなった古いチャペルには子どもを含めて老若男女が 50名程がいました。小井沼さんから、中には字が読めなかった方もおられると聞きました。一定の訓練を受けた後、居場所を得て人間としての尊厳を回復し、堂々と生きている姿に感銘を受けました。わたしたちは夕方のお茶の会、讃美と感話、司祭によるミサに参加した後、美味しいスープとパンの夕食をいただきました。ポルトガル語で語られる内容は全くわかりませんでしたが、セレブラソン(祝祭)の中では、数名の方が自分の思いを堂々と語っていました。

当日お誕生日を迎えた方がおられ、ケーキと歌でお祝いしました。本当の家族ではなくても、共同体の一員として暖かく迎えられていました。トリンダージ共同体からの帰路、地下通路や高架陸橋下で段ボール生活をしている日本の路上生活者を思い浮かべました。もちろんサンパウロ他でも路上生活者は多く見かけましたが、トリンダージ共同体はひとつの「理想」の形です。ロウソクが灯されたチャペルの中で、仲間たちと寄り添って暮らせる共同体の存在を本当に羨ましく思うと同時に、「希望」を感じました。

「CESE」Coordenadoria Ecumênica de serviço:

<https://www.cese.org.br/en/>

サルバドール市に本部事務局がある CESE は、1973年に設立され、ブラジル各地で人権活動を実践しているエキュメニカルな組織です。CESE は、日本キリスト教協議会(NCCJ)のように教派を越えたキリスト教人権団体です。ルーテル教会、合同長老教会、聖公会、バプテスト教会だけでなく、ローマカトリック教会も加盟しています。わたしたちは本部を訪問し、Sônia Gomesu Mota 総幹事と懇談することができました。

CESE は、人種差別、性差別、草の根の環境活動などを教会間に繋げ、国内および国際レベルでエキュメニカルな支援や動員をしています。NCCJ も加盟している ACT アライアンスの一員でもあり、人権・開発・緊急事態に関する世界的課題に先進的に取り組んでいます。更に CONIC(Conselho Nacional de Igrejas Cristãs do Brasil)とも連携し、アマゾンの先住民族や環境問題に関する重要なパートナーです。今回、NCC 教育部のエキュメニカルな活動をパワーポイントで紹介することができました。今後、NCCJ や WCC が CESE との連携を深められるよう願っています。Sonia さんは、ブラジル合同長老教会の女性牧師で、サルバドールのヴァレリオ・シルヴァ合同長老教会の礼拝でもお会いしました。

11月にブラジルで開かれた国連気候変動枠組み条約第30回締約国会議(COP30)が閉幕しました。「パリ協定」に背を向けるトランプ政権が不参加な中、ブラジルのルラ大統領は「化石燃料なしで生きる方法を考え始める必要がある」と強調し、80カ国以上が賛同しました。世界が排出する二酸化炭素の多くを吸収しているアマゾンの森林を守るために、CESE も積極的に活動しています。原発の再稼働を容認している日本政府及び関係機関のスタンスは大いに問われます。

“We cultivate the land and it cultivates us”

「MST」(土地なき農業労働者運動)Movimento dos Trabalhadores Rurais Sem Terra

最終日にはサンパウロ市にある MST 本部を訪問しました。事前の知識がなかったわたしは、農業関係の機器などを備えた事務所を想像していましたが、大変な誤解でした。

MST は、各地の大地主の農業放棄地を一旦農業従事者に貸与して実習訓練をします。訓練の実績が認定されると弁護士が付いて政府との交渉が開始され、認定後には農業労働者として農地が与えられるという画期的なシステムです。4 階建てのビルにはさまざまな部署と共に放送局をも備えた国際 NGO でした。1 階では無農薬野菜や果物が販売され、カフェもありました。国内だけでなく他国とも繋がっていて、パレスチナへの緊急支援を実施していました。館内を案内してくれた Victoria Paz さんに、農村伝道神学校と関係の深い「アジア学院」(那須塩原市)をご紹介しました。

帰国後、アジア学院に MST の資料を郵送した所、荒川朋子さん(学校法人アジア学院 常務理事、アジア農村指導者養成専門学校関係構築・アウトリーチ総括、前校長)から以下のようなお返事をいただきました。

「ブラジルには 3 人のアジア学院卒業生がいますが、皆、MST の運動によって自分の農地を得た農民の子どもたち(2 世代)です。現地で MST と関係した働きをされていた日本人神父*のご紹介でした。2013 年に卒業した 3 人目の方が最後です。その後は来ておりませんので、久々に情報を読ませていただきました。Victoria Paz さんの紹介もありがとうございます。南アメリカからはそれほど多くないのですが、数年に一度くらい学生が来ています。

最後は 2022 年のグアテマラからの 2 名の少数民族の女性でしたが、言葉が大きな壁でした。南アメリカはアジアともアフリカとも違う問題を抱えています。農村リーダーの育成はとても重要だと思っています。これからのつながりについても模索中ですが、アジア学院を知ってくださる方が現地にいることは心強いです。」

今後、アジア学院・MST・農村伝道神学校の繋がりが更に深められるようにと願います。」



*注:パラナ州で働いておられた佐々木治夫神父のこと。ラキネットのフィールドワークに協力し、MST の活動現場をよく案内して下さった。去る 11 月 18 日、95 歳でクリチーバにて帰天されました。

Ⅲ 自分の性は自分で決める(「ジェンダーアイデンティティー法」)

彼らは呪いますが あなたは祝福して下さいます。

彼らは反逆し、恥に落とされますが あなたの僕は喜び祝います。(中略)

主は乏しい人の右に立ち、死に定める裁きから救って下さいます。

(詩編 109:28,31)

首都ブラジリアでは、イエズス会が運営する「ブラジリア文化センター」に滞在しました。春の花

に囲まれた緑豊かな中庭に癒されました。カトリック団体のご紹介により、2名のセクシュアルマイノリティ当事者の方とお会いしました。全く初対面だったにも関わらず互いの国の状況や活動を紹介しあい、新しい視点も与えられた良い出会いでした。

以前、2012年にアルゼンチンで「ジェンダーアイデンティティー法」が法制化されたことを聞いていたので、早速ブラジルの状況について伺いました。この法律は18歳以上であれば性別変更を申請できますが、隣国のブラジルでも2013年に法制化されていました。2022年の統計では、11,022件の同性婚による婚姻が登録され、増加傾向にあるそうです。

トランスジェンダーについても質問しました。ブラジルでは性別適合に関する手術料は無料との事です。但し、診断から治療までに時間がかかるため、早期の手術を望む人はタイに赴くそうです。日本では、施術の順番によっては保険が適用されないため、疑問の声があがっています。

ブラジルのパスポートは、F・M・N(ノンバイナリー)と記載されるそうです。日本と比べ、制度的には格段に整っているブラジルですが、家族の理解が得られなかったり精神的な葛藤から、若くして亡くなる方も多いようです。ブラジル社会での実情はわかりませんが、21世紀の現在、聖書の記述を根拠に当事者を追い詰めていることは否定できません。性別は男女の2種類でそれ以外は認めない、それ以外の婚姻も認めないとの聖書理解が根強いのでしょうか。法制度が整えば苦悩が除かれるわけではなく、人々の理解と受容が求められますし、教会やキリスト者の意識が問われていると思います。

神ご自身は、苦悩する当事者の涙を拭い、掬い上げてくださっていると思います。数日後、ブラジリア聖公会大聖堂においてフェミニスト神学・クィア神学に関する小さな集会をもちました。この集会で、日本キリスト教協議会(NCC)が2024年に発行した Gender Justice Policy(英文)を配布し、日本の状況について報告しました。会場となった聖公会の教会では、既にゲイのカップル5組の結婚式を挙行したとのことでした。同性婚は元より夫婦別姓さえ認めようとしない日本政府や一部の政党の頑迷さだけでなく、教会もまた世界から問われているように思います。自らの意思や努力では変えられない出自・肌の色・セクシュアリティに関する人々の涙と嘆きも、神の革袋にひとつ一つ蓄えられていると信じています。

帰国後の11月28日、東京高裁は同性婚否定を「合憲」と判断しました。全国の同種訴訟6件で初の「合憲」判決で、他の5高裁判決はすべて「違憲」でした。世界各国の中では、同性婚を根拠として「死刑」にする国もありますが、生まれた国によって生死が決まり、生きる場や権利さえ異なります。日本政府だけでなく、教会やキリスト者も大きく問われていると思います。

IV 負の歴史をも「土壌」とし、豊かな宣教活動へとリードする解放の神学

1. 植民地支配を受けたブラジル・奴隷制

ブラジルの地で、300年間になされた収奪や奴隷制の爪痕は深く残っていますが、人々が連帯して負の歴史に伴う課題に向き合うための「土壌」として備えられていたとも言えます。特に奴隷売買の中心地であったサルバドール市にある CESE は、エキューメニカルな活動としてカトリック教会と協働しています。植民地支配だけでなく奴隷制が300年も続いた年月の間になされた性暴力被害の大きさは想像を絶しますし、人々の中にある家庭や結婚の概念にも影響が及ぼされたことは確かでしょう。その点に関して詳細にお伝えできる知識はありませんが、負の歴史

であることは確かです。けれども、かつて奴隷売買の拠点であった地は、現在国際的なエキュメニカル市民運動の拠点となっています。長い年月を要したと思いますが、負の歴史は「土壌」となり、人権・環境・平和へと声をあげる市民活動へと発展してきました。

各地にある MST の活動も大きな希望です。前述の英文“*We cultivate the land and it cultivates us*”は、MST 発行誌のタイトルですが、励ましに満ちた言葉です。「泣きながら夜を過ごす人にも 喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる」神を仰ぎつつ、地球の反対側に暮らすわたしたちは、誰の傍らに立つのか、自らに問いたいと思います。

2. 日本の植民地支配を受けた朝鮮半島

11 月 13 日～15 日にかけて、「和解と平和をめざす日韓プラットフォーム合同会議」<http://jkplatform.org/> がソウル市で開催され、運営委員として出席しました。同プラットフォームは、両国間の溝となっている負の歴史と歴史認識を乗り越えていこうと、両国の宗教者・市民活動家たちによって 2020年に立ち上げられました。定期的にオンラインセミナーを開催し、声明文・抗議文発出、合同記者会見の他、ソウル日本大使館前の「水曜デモ」や日本の国会前の「19 日行動」にも連帯しています。

また、日韓両国の若者(大学生や活動家)を対象とした「ユース平和フォーラム」を開催してきました。両国のユース各 20名ずつが参加し、2022年(ソウル市パジュ)2023年(東京・荒川)2024年(済州島)にて 4 泊 5 日を共に過ごし、講演、フィールドワーク、話し合いを経て、最終日にはユース自身の声明を表明しました。

残念ながら、ブラジルの歴史教育についての知識はありませんが、日本の歴史教育や歴史教科書には大変問題があるため、植民地支配の歴史を学ぶことは大きな意味があります。歴史認識は「国対国」ではありませんし、両国共に歴史修正主義者は存在します。両国の若者たちどうしが出会い、フィールドワークを通して、植民地支配の事実を共に学ぶことは大切です。ユースフォーラムを通して、バランスのとれた歴史認識を身に付け、平和をつくりだす働き人になってほしいと願っています。ブラジルは、植民地支配下において長く奴隷制が存続しましたから、歴史教育の実態を知りたいと願っています。

上記合同運営委員会が始まる前夜、「正義記憶連帯」設立 35周年支援の夕べ(会場:ソウル女性プラザ国際会議場)が開催され、委員一同で参加しました。「正義連」は、日本軍性奴隷問題解決を目的として活動し、ソウル市には優れた資料館もあります。支援会には、同団体の理事をはじめ支援者が 200 人程参加していましたが、圧倒的に若い女性が多く、羨ましい限りでした。日本の市民運動の実態とは大きく隔たっています。背景には、軍事政権への抵抗、民主化闘争など、市民運動や政治への姿勢が日本と大きく違うからでしょう。

3. 負の歴史が「土壌」となり、活発な市民運動に

植民地支配を受けた国々には、支配者・権力への抵抗、反逆、真相究明へのエネルギーが脈々と流れています。韓国での尹大統領の罷免、ブラジルでのボルソナロ前大統領の収監・恩赦反対などには、胸のすく思いがしました。一部の富裕層が政治の実権を握る事への警戒感や「否」との思いが長い歴史を通して培われ、「土壌」として市民を支えているように思います。もちろん、ブラジルにも富裕層を基盤にした保守勢力、韓国にも財閥や親日派などが実験を握っていますし、韓国の教会は多くが保守的で、どちらかと言えば保守政党を支持する傾向があります。けれ

ども、長く続いた軍事政権に対する市民や若者、そして進歩的なキリスト者たちの抵抗の歴史があり、民主化運動と共に政治に対する強い関心があります。その点では、ブラジル各地で実践されている市民運動(CESE・MST 他)と同様な歴史的な背景と繋がりを感じました。支配者側の体制や資質は変わりにくいのですが、被支配者側や若者たちは負の歴史を跳ね返すパワーを蓄えているように感じました。

4. 解放の神学とカトリック教会

解放の神学についてはまだ学び始めたばかりですが、殉教者たちや貧しい人々のいのちの犠牲を悼む深い祈りから、社会構造の変革のために立ち上がるべきだと行動していく神学には何の抵抗感もなく、励まされます。今回の限られた研修でしたが、カトリック司祭を中心に信徒たちが担っている宣教活動を垣間見ることができたことは大きな収穫でした。カトリック教会間にも違いがあると思いますが、同じ修道会でも違いを感じました。

帰国後、日本カトリック中央協議会の「機構改革」により、「正義と平和協議会」が閉鎖されることを知り驚愕しました。教皇パウロ6世が世界中に呼びかけて、日本でも50年前に発足した「正義と平和協議会」でしたが、消滅しようとしています。日本において、カトリックだけでなくプロテスタントと共に、平和や人権に関する市民運動と協働し、リードしてきた団体であり、大きな痛手です。ある方のコメントでは、「組織の弱体化ということもありますが、司教を形成する人々の世代交代で社会批判的なことを避けたい人々がリーダー層になっていることも関係している」とのことでした。

キリスト教界においても、出版社やメディアの閉鎖・縮小が取りざたされています。日本社会が右傾化の一途を辿っている中、わたし達は誰の傍らに立ち、共にどのように行動するよう求められているのでしょうか。この問題を考える上でも、解放の神学への学びを更に深めたいと願っています。

追記:

ブラジル訪問の目的のひとつでもあったオリンダのアルト・ダ・ボンダージ教会を訪問し、多くの子どもたちが参加している空手教室とギター教室を見学することができました。前述のように、2018年にNCC 教育部平和のきずな献金・海外献金先として支援した教育プログラムです。今回の研修旅行では、上記教会だけではなくサルバドールにあるヴァレリオ・シルヴァ合同長老教会の礼拝にも出席し、教会員や子どもたちにも会うことができました。後者においては、CSや地域の子どもたちを対象とした、自尊感情を高める「ストーリーテリング」の活動を開始していました。

帰国後、2026年度「平和のきずな献金」海外献金先として両教会の教育プログラムを推薦し、11月末に開催された教育部理事会で承認されました。小井沼眞樹子さんは元より、わたしにとっても更なる喜びとなりました。